小學簡易科讀本

中根淑 公著
内田嘉一

巻六

検定申請本

K120.8
6
6

K120.8

6

6

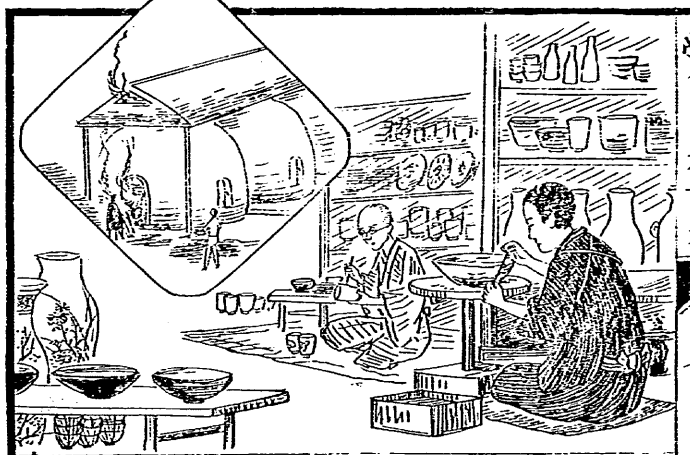
中根淑
内田嘉一　仝著

小學簡易科讀本

東京書舗金港堂藏板

第一課　陶器

人ノ日々ニ用フル茶碗土瓶皿鉢ノ類ハ。土ヲ焼キテ造リタルモノナリ。之ヲ瀬戸物トモ云ヒ。又陶器トモ云フ。汝等陶器ヲ製スル處ヲ見タルコトアリヤ。陶器ハ粘土ヲコ子。輪車ニ載セテ回シ。鉢ニテ種々ノ形ニ造リ。之ヲ乾シ固メ。再ビ小刀ニテ其形ヲ削リ直シ。後窯ニ入レテ焼キ固ム。之ヲ素焼ト云フ。此素焼ニ上藥ヲカケ。又窯ニテ焼



キ。夫レヨリ繪具ニテ種々ノ模樣ヲ畫キ。之ヲ明爐ニ入レテ燒クナリ。

其粘土ヲ輪車ノ上ニテ回ス時。指ニテ中央ヲ凹ムレバ。周圍ハ自然ニ高クナリテ。茶碗ノ形トモナリ。又德利ノ形トモナル。其變化ハ實ニ面白シ。斯ク形ノ精巧

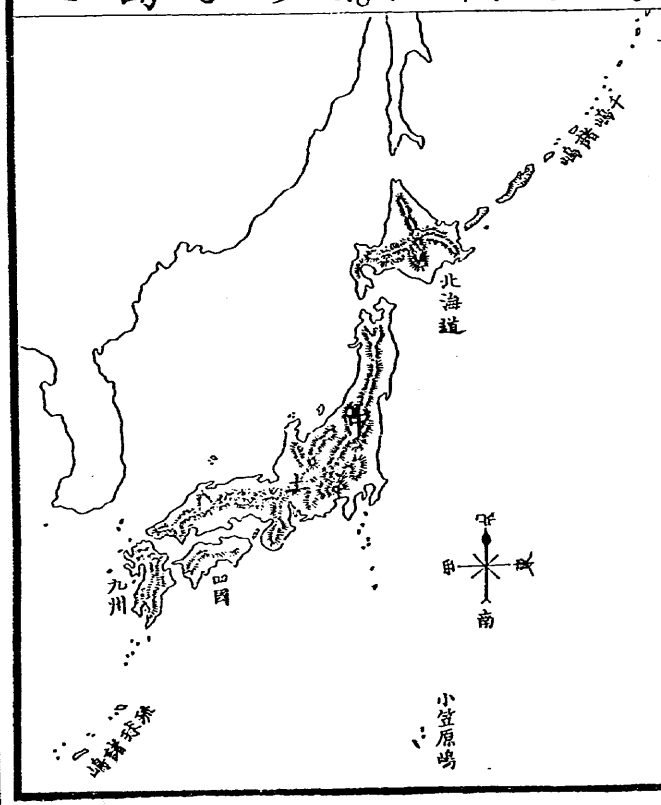
ニ成ルハ。輪車ノ回ルカニヨリテナリ。

我ガ國ニテ。陶器製造ノ最モ盛ナル處ハ。尾張ノ瀨戸。肥前ノ有田。京都ノ清水等ナリ。其中。瀨戸燒ハ。日用ニ供スルモノ多シ。陶器ヲ瀨戸物ト稱フルハ。瀨戸ヨリ出ヅルモノ多キユヱ。外ニテ製スルモノモ。自ラ瀨戸物ト云ヘルヤウニハナリシナリ。

第二課　日本地誌

我ガ日本ハ島國ニシテ。四方皆海なり。島の大な

る者四つ。小なるもの數百個あり。此地圖を見よ。中央にありて最も大なる島を中土と



いふ。汝等の先きに學びし。武藏攝津山城等の國ある處なり。中土の西南にあたりて。大なる島を九州といふ。肥前の國などのある處なり。九州と中土との間にある島を四國と云ふ。阿波の國などのある處なり。又中土の北の島を北海道と云ふ。渡島の國は此中にあり。

我が國。全體の地形は。狹くして長く。東北より斜めに西南に横はりて。恰も弓の形をなし。長さ大凡五百里あり。其外北海道の東北には。千島諸島

あり。九州の西南には。琉球諸島あり。又南海には。小笠原島諸島あり。是等は。何れも小さき島々なり。

日本全國は。大別して畿内八道とし。更に小別して。八十五國とす。畿内ハ中央一圓の地。八道は東海道東山道北陸道山陰道山陽道南海道西海道北海道なり。全國の面積は。大凡二萬四千七百餘方里。人口は大凡三千八百餘萬あり。

三府五港は。汝等既に其位置と有樣とを知れり。

尚ほ之に次ぎて大なる都會あり。尾張の名古屋。陸中の仙臺。加賀の金澤。安藝の廣島。肥後の熊本なり。人口五萬より十萬以上に至り。何れも縣廳鎮臺學校等ありて。頗る繁盛なり。

日本の氣候は。熱からず。寒からず。溫和なる處多く。地味は概ね肥沃にして。農業盛に行はる。産物は。穀物魚類獸類材木果物礦物等。凡て人生に必用なるもの皆之あり。茶生糸絹帛陶器漆器等は。汝等の既に知れるが如く。我が輸出品中の重な

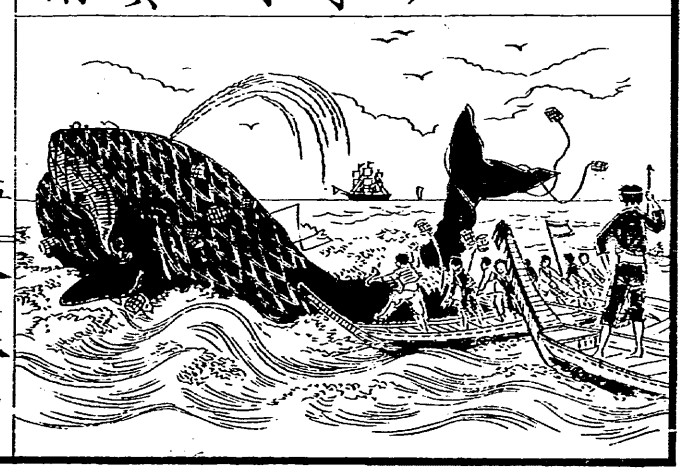
るものなり。

第三課　鯨

鯨ハ海中ニ住ム最大ノ動物ナリ。水ニ住ミテ。形魚ニ似タレバ、魚類ノ如ク思ハルレドモ。決シテ魚ニアラズ。凡ソ魚類ハ皆卵ヨリ生ズル者ナレドモ。鯨ハ則チ犬猫ノ如ク。胎生トテ。形ヲ成シテ生マルヽ者ナリ。加之。魚ハ鰓ニテ水ヲ呼吸スレドモ。鯨ハ人ノ如ク肺臓アリテ。空氣ヲ呼吸ス。又魚ノ血液ハ冷カナレドモ、鯨ノ血液ハ温カナリ。

是等ヲ推シテモ。其魚ニアラザルコト明カナリ。

鯨ハ身ノ長八丈餘ニ至ルモノアリ。頭ハ全體ノ長サノ三分ノ一アリテ。上ニ水ヲ噴キ出ス孔アリ。靜ニ水面ニ浮ブトキハ。島ノ俄ニ湧キ出ヅルガ如ク。水ヲ噴キ出ス有樣ハサナガラ雨



ヲ降スニ似タリ。口ハ大ナレドモ。喉狹クシテ大ナル者ヲ呑ムコト能ハズ。又口中齒ナクシテ。上齶ニ鯨鬚ト稱スル櫛ノ如キ者アリ。コノ鬚ノ間ヲ過ギテ通ル者ニ非ザレバ。口内ニ入ラズ。故ニアミ鰯ノ如キ小魚ノミヲ吸ヒ込ミテ食トス。鯨ハ其用多キモノナリ。皮膚ノ下ニ。厚サ一尺許ノ脂肪アリ。之ヲ取リテ燈油ヲ製ス可シ。肉ハ其下ニアリテ。人ノ食トナリ。鯨鬚ハ俗ニ鯨骨ト稱シテ。最モ彈力强キモノナレバ。種々ノ器械ヲ造

ルニ用フ。

第四課　鯨獵

前に學べるが如く。我が國は四方海なるが故に。海濱多し。之に住むものは。概ね漁業を職とす。その地の海にすりて。鰯を捕るもあり。鮭を捕るもあり。鰹を捕るもあり。又鯨を捕るもあり。鰯は處處に産すれども。安房下總に多く。鮭は北海道に多く。鰹は土佐薩摩。鯨は紀伊の熊野肥前の平戸に多し。

汝等鯨獵を見たることありや。鯨を獵するには。數多の小舟を出して。處々に待ち受け。其水面に浮ぶを見て。かはる〴〵進み。鏢と云へる。槍に似たるものを投げ附け。遂に之を殺すなり。鯨は一二本の鏢を受けて。俄に死するものに非ざれども。尚ほ呼吸をなさんが爲に。屢々水面に浮ぶを以て。數十本の鏢を受けて。遂に死するに至る。鯨の尾には甚だ力ありて。小舟の如きは。屢々之に覆へさるゝことあり。故に若し無難にして之を捕るを得れば。獵師の喜び一方ならず。直ちに繩を結びて。濱邊に引き來ること。宛も軍人の戰に勝ちて。陣を引き上ぐるに似たり。

第五課　石炭

石炭ハ。其色黑クシテ漆ノ如ク。其質脆クシテ碎ケ易ク。能ク火ニ燃ユルモノナリ。元來石炭ハ前世界ノ植物ニテ。其後深ク地中ニ埋レ。久シク歲月ヲ經ルニ隨ヒ。遂ニ化シテ炭トナリシモノナリ。故ニ之ヲ取リテ薄ク割クトキハ。中ニ木理ノ

有ルモノアリ。我ガ國ニテ石炭ノ多ク出ヅル處ハ。肥前ノ高島。筑後ノ三池。石狩ノ幌内ニシテ。其質皆良好ナリ。

此物。燃材中最モ貴重ナル者ニシテ。汽車汽船及ビ諸工場ノ汽機アル處ニハ。必ズ缺クベカラザルモノナリ。其用唯此ノミニ非ズ。之ヲ製シテ染料ヲ採リ。又燈火ノ用ニ供スベシ。夫ノ瓦斯燈ニ用フルモノハ即チ此氣ナリ。

瓦斯燈ハ。石炭ヲ蒸シ燒キニシ。之ヨリ瓦斯ヲ採リテ器中ニ貯ヘ。之ヲ地中ノ鐵管中ニ放チ。各所ノ瓦斯燈ニ流通セシメ。日暮ニ至レバ之ニ火ヲ點ズルモノナリ。

第六課　魚賣

何れの國にても。婚禮の式抔には。種々の俗習あるものなり。或る外國の婚禮には。必ず鰈を用ふるを儀式とせり。曾て其國の大家に婚禮ありしに。折節風吹き海荒れて。少しも魚なきまゝ。處々へ人をやりて。鰈を索けるに。一尾だに見當らず。

困ど居たり。折柄一人の魚屋ありて。鰈の大なるものを賣り來りければ。主人を始め一同大に喜び。價は幾何ぞと問ふに。魚屋は甚だ高〜とのみ云へり。さらば百圓にもやと問ふに。百圓よも二百圓にもあらずと答ふ。主人は驚きて。尚ほ高〜やといへば。魚屋は五百圓にも六百圓にもあらず。金錢は少〜も望まず。唯此料として。大なる笞にて我が脊を百本打たまへ。抑此魚は笞百本の價ありといふ。

主人は不思議に思ひながら。かゝる戯れは後にして。早く之を賣り渡せと言へども。魚屋は猶ほ言ひ張りて已まず。主人大に困ど果て。今は早く鰈を得んとの心なりければ。言ふがまに〜笞にて買はんとて。下部に命ぢて。輕く之を笞うたしむ。かくて笞の數五十に至り〜時。魚屋は暫く待ち給へと呼べり。主人何事ぞと問ひければ。後の五十は讓り受けたしと望むものありといふ。主人は益〜いぶかり。笞うたれんを乞ふものは。

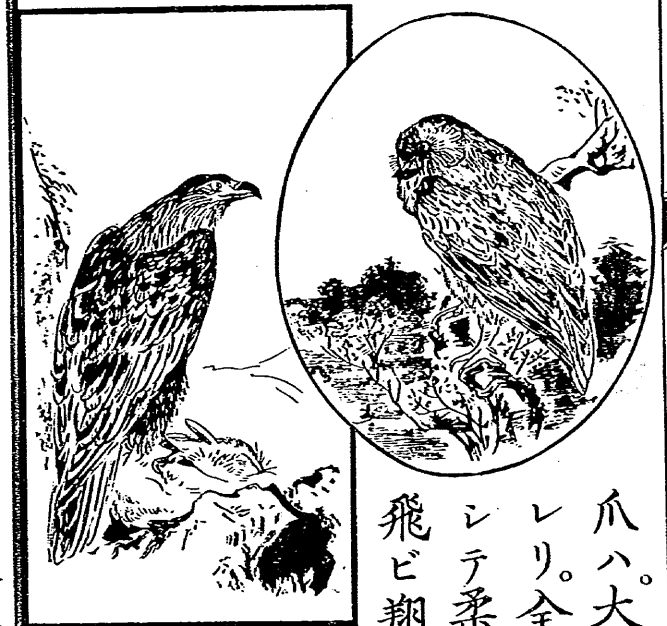
如何なる奇人ぞ。其もの何處に在ると問へば。魚屋對へて。貴殿の門番なり。吾先に門を過ぎんとするとき。魚の半價を與へずば。此門を過ぐるを許さずと言へり。故に今其半價を與へんとすといふ。主人始めて魚屋の意を悟り。直ちに門番の不正なるを責め。大なる笞にて。強く五十本打ちたる後。遂に暇を出したり。

不正の利を得んとする人は。反て其身に禍するものなり。古人曰ふ。人欲に徇へば。利を求めて未だ得ざるに。害已に之に隨ふと。誡むべし。

第七課　梟

フクロフハ。顏貌奇異ナル鳥ナリ。眼ハ圓大ニシテ。前ニ向フ。瞳孔甚大ナルガ故。晝ハ却テ物ヲ見ルコト能ハズ。故ニ終日林ノ中木ノ洞ナドニ隱レ。暮方ヨリ出デヽ餌ヲ求メ。常ニ鼠蛙魚兒其外小鳥ヲ捕ヘテ食フ。

嘴ハ黃色ニシテ短ク。鉤ノ如ク曲リテ。肉ヲ裂クニ宜シ。脚ハ羽毛多クシテ。纖ニ爪ヲアラハシ。其



爪ハ。大ニシテ鋭ク尖レリ。全身ノ羽毛疎ニシテ柔軟ナルガ故ニ。飛ビ翔ルニ羽音ヲナサズ。寢鳥ヲ襲フニ便利ナリ。鷹鷲モ皆梟ト同ジク。生肉ヲ食フ鳥ナリ。鷲ハ。食肉鳥類中最モ大ニシテ猛ク。容貌雄偉ナリ。或ハ深山ニ居リ。又海邊ニ棲ム。其巣ハ嶮崖ナル巖上ニ樹枝ヲ以テ作ル。此鳥我ガ國ニテハ北海道ニ多シ。時々海濱村里ヲ翔リテ餌ヲ求メ。之ヲ見レバ忽チ飛ビ下リテ攫ミ去ル。常ニ生肉ヲ好ミテ。死肉ヲ食セズ。多クハ魚虫小獸ヲ餌トスレドモ。時アリテハ小兒ヲ攫ミ去ルコトアリ。其猛惡懼ルベシ。鷹ハ形鷲ニ似テ小ナリ。亦勇悍ニシテ。巧ニ鳥類ヲ捕フ。故ニ人之ヲ馴養シテ鳥ヲ獵

スルニ用フ。

第八課　熊

一童子朋友を伴ひて。或日動物園に遊び。珍らしき獸類を觀。家に歸りて父に問ひけるは。我が家の熊の皮は。いづこの産ぞ。父の曰はく。北海道の産なり。童子曰はく。今日吾動物園にて。内地産の熊を見たるに。體大にして全身黑褐色の毛ありて。喉の下には。新月形の白毛あり。父の曰はく。其毛を俗に月の輪といふ。童子又曰はく。熊は人の如く立ちて歩むものか。檻の中に居ながら。屢々後足にて立ち。其樣頗る勇猛なり。若し山中にて之に逢ひたらんには。定めし恐ろしかるべし。父の曰はく。熊は性猛く力强し。且後足にて人の如く立ち歩むことあり。其擧動。平生は遲緩に

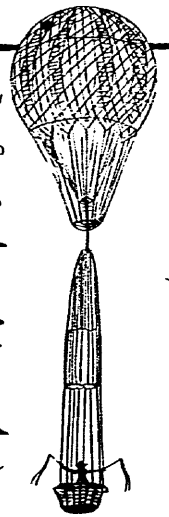
似たれども。怒るときは輕捷にして。樹木にも登り。水をも泳ぎ。常に深山に居り。冬月雪ある間は穴の中に木の枝葉を敷きて。其上に眠り。雪の解くるに及び。始めて穴を出づ。

童子又問ふ。熊は何を食するか。父の曰はく。果實小獸虫類樹根を食ふ。殊に砂糖の如き甘きものを嗜むが故に。動もすれば蜂蜜を求む。其皮は褥と爲すに宜しく。肉は食となり。脂は燈油膏藥となり。膽は熊の膽とて。健胃の藥となる。

第九課　空氣

汝等手ヲ伸シテ。急ニ左右ニ動カシ。或ハ上下ニ動カサバ。何物カ手ニ觸ルヽヲ覺ユベシ。其手ニ觸ルヽ者ハ。抑何物ゾ。是卽チ空氣ト云ヘル目ニ見エザル者ニテ。扇ヲ用フレバ風ノ觸ルヽヲ覺ユルモ。亦空氣ナリ。元來風ハ空氣ノ流動スル者ナリ。空氣ハ色モナク香モナキ故目ニモ見エズ。鼻ニモ匂ハザレドモ。處トシテ有ラザルコト無ク。遍ク地球ヲ包ミテ。動植物ヲ生育スル。尤モ大

切ナルモノナリ。故ニ動植トモニ。空氣ナクテハ片時モ生活スルコト能ハズ。試ニ見ヨ。人畜共ニ呼吸ヲ止ムレバ。暫時ニシテ死シ。烈火モ壺ニ入レテ之ヲ蓋ヘバ。直チニ消滅



ス。是皆空氣流通ノ道絶ユルニ由テナリ。又空氣ハ物ヲ壓シ。輕キ物ヲ浮ムル等ノ性アリ。火消シニ用フル喞筒ハ。空氣ノ力ヲ藉リテ。水ヲ壓シ上グルナリ。空中ヲ飛行スル輕氣球ハ。嚢ノ中ニ輕キ氣アルガ故ニ。空氣之ヲ浮ムルナリ。猶空氣ノ性ニ就テハ。學ブベキコト甚ダ多シ。他日必ズ講明スベシ。

第十課　虹

夕立の雨晴れ渡れば。木々の青葉雫したゝり。庭

のほこりかげろうと共に。何處へか消に失せ。今まで暑さに堪へかねし身の。忽ちにして心地よきは。夏の天氣の常なり。此時美しき色の弓形の物。端なく空中に現はるゝことあり。之を虹と云ふ。虹は日輪の光。猶降り殘れる雨點に映じ。其れより折れて反り來たるもの。人の目に入り。始めて斯くの如く見ゆるものなり。故に日輪西にあれば。必ず東に現れ。日輪東にあれば。必ず西に現れて。常に相對す。其色赤を始とし。橙色黄色綠色

青紺紫と次第に重なり。總べて七色なり。抑日輪の光は。常には一色なれども。其分るゝときは。七色トあろ。彼の虹の如きは。日光雨點に映ずる時に分るゝなり。若し試に三角のがらすを取り。日光をして之を通過せし

めば。忽ち分れて七色となり。其麗はしきこと。少しも虹と異なること無るべし。瀧壺杯の水煙多き處には。晴天にも猶七色の小虹を見ることあり。是亦同ド理なり。

第十一課　天然物ノ別

甲ト乙ト二人ノ學童アリ。今日ハ休日ナレバトテ。牛ヲ牽キテ野ニ遊ビ。ヤガテ木蔭ニ息ヒ居タリ。偶教師ノ此ニ來リシカバ。童子立テ禮ヲナス。教師モ亦答禮シテ曰ハク。ケフハ溫和ノ天氣ニテ。野游ニハ殊ニ宜シ。且ツハ此地ノ風景モ亦面白シ。今汝等何ヲ詠メテ樂ムカ。曰ハク。此地ニ在ル物ナリ。此地ニ在ルハ何々ゾ。甲ノ曰ハク。彼レニ山アリ。此ニ川アリ。其間草木土石アリテ。鳥鳴キ

牛游ビ皆目ヲ娛マシムルニヨロシ。故ニ是等ヲ詠メテ樂メルナリ。教師ノ曰ハク。今汝等ノ觀ル所ハ。山川草木土石鳥獸ナリ。是等ノ總名ヲ天然物ト云フ。天然物ニハ。各其性ノ異ナル所アリ。牛ト木ト石ト土トハ。等シク天然物ナレドモ。皆各異ナル所アリ。試ニ問フ。汝等之ヲ知ルカ。乙ノ曰ハク。牛モ生アリ。木モ生アリテ成長シ。其數盡クレバ。終ニ死シ枯ルヽコトアレドモ。土ト石トハ生アルコトナク。又成長スルコトナシ。教師曰ハク。誠ニ其言ノ如シ。其生アルモノヲ有生物ト云ヒ。生ナキモノヲ無生物ト云フ。有生物ノ中ニモ。亦大ニ異ナル所アリ。譬ヘバ。牛ハ木蔭ニアルコトヲ好ミ。又隨意ニ動キテ草ヲ食ヘリ。木ニ於テハ然ルコト能ハズト。時ニ甲ノ曰ハク。吾善ク牛ト木トノ異ナル所ヲ知レリ。牛ハ口アリテ。食物ヲ食ヘドモ。木ハ口ナクシテ食物ヲ食ハス。乙又曰ハク。牛ハ自在ニ運動スルコトヲ得レドモ。木ハ一處ニアリテ。動クコト能ハズ。牛ハ好デ草ヲ

食ヒ暑サ寒サヲ知リ。痛キ痒キヲ知ル。木ハ物ヲ好ムコトナク。知ルコト無キガ如シ。如何。

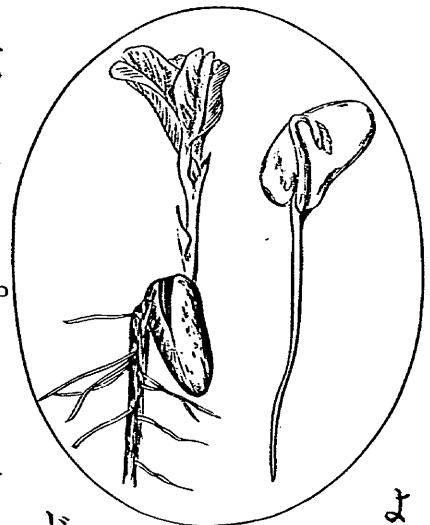
教師曰ハク。然リ。其運動シテ知覺アルモノ。即チ鳥獸虫魚ノ類ヲ動物ト云ヒ。其生アルモ。運動知覺無キモノ。即チ草木ノ類ヲ植物ト云フ。又土石金銀ノ類ノ如ク。生モ無ク。知覺運動モ無キ者ヲバ。之ヲ礦物ト云フナリ。故ニ天然ノ物ヲ大別シテ三ツトナシ。之ヲ三界ト云フ。一ニ動物界。二ニ植物界。三ニ礦物界ナリ。汝等見ル所ノ物ハ。皆此三界ノ中ニ屬セザルハナシ。故ニ物ニツキテ。自ラ考ヘ。善ク之ヲ類別スベシト。懇ニ教ヘテ去リケレバ。童子喜ビテ。互ニ天然物ノ類別ヲ問答シ。各物ノ相異ナル所ヲ考ヘ。終ニ三界ノ別ヲ明ニ知ルコトヲ得タリシトゾ。

第十二課　植物の成長

植物は。通常種子より生ずるものなり。種子は。初め地面より水分を吸ひ上げて。芽と根とを出し。且つ其體中より養分を取りて。先づ小さき植物

の形をなし。漸く變じて地中より養分を取り。終に其成長を全くす。豌豆蠶豆の類を。濕ひたる「フラヲルル」の上に置くときは。數日にして芽と根とを出し。分明に其發生の有樣を見るを得べし。

植物は。根にて養分を取り。之を葉に輸る。葉は空氣中の炭酸と云へる氣を吸ひ。其炭素を留めて。酸素を吐き。日光の力を假りて。養液を釀すべき大切の處なり。釀したる養液は。常に植物の全體を循環して。各處を養ふ。又根は植物の體を地に固定し。葉は水分を蒸發するの効用あり。故に根地中に蔓り。葉空中に茂りて。日光を受くるに程よきときは。植物能く成長して。有用の材となり。或は美しき花を開き。或は甘き實を結び。或は多くの穀菜を生ず。



植物の中には。高山に生ずるものあり。通常の山

に生ずるものあり。平地に生ず。水中に生ず。又は木の陰岩の間に生ずるものあり。或は好で他の樹の幹に寄生するものも亦これあり。

落葉松の類は。能く高山に生ず。松杉檜茅草の類は。通常の山にも平地にも生ず。蓮慈姑菱菖蒲の類は。淡水の中に生ず。昆布荒布鹿角菜の類は。海水の中に生ず。苔類は。好で日陰の地に生ず。寄生樹類は。他の樹に宿りて生ず。其性各々同ジカラズ。

人若し植物の性に戻りて。日陰を好む苔類を。日向の地に植ゑ。日向を好む菜類を。日陰の地に植うる時は。其能く成長するもの幾ど稀なり。

第十三課　材木

家ヲ建ツルニ最モ有用ナル材木ハ。松杉檜樅欅ノ類ナリ。松ハ黒松赤松ノ二種ヲ以テ用多シトス。黒松ハ膚白クシテ。中心紅ヲ帯ビ。質堅ク脂多クシテ。能ク水濕ニ堪フ。赤松ハ薄赤クシテ。稍黄色ヲ帯ブ。凡テ松ノ材ハ。梁トナシ。桁トナシ。橋杭

トナスニ宜シ。或ハ板ニ挽割リテ。床ヲ張ルニ用フ。

杉ハ赤杉白杉ノ二種アリ。共ニ其幹眞直ニシテ。長サ數丈ナル者アリ。赤杉ハ。膚薄赤ク質堅クシテ。脂多ク。白杉ハ。膚白ク質弱クシテ。脂少シ。凡テ杉ノ材ハ柱ニ用フルニ宜シ。板ニ挽キタルハ。天井屋根裏シタミ等ヲ張ルニ用フ。

檜モ其幹眞直ニシテ。長サ數丈ナルモノアリ。木曾ノ山中ニ産スル檜ハ。最良ノ材ナリ。其色白クシテ。少シク黄ヲ帶ビ。質堅カラズ柔カナラズ。工ヲ施シ易クシテ。能ク腐蝕ニ堪フ。材木中最モ上品ナルモノナリ。故ニ東京地方ニ在リテハ。上等ノ家屋ニ非ザレバ。用フルコトナシ。又杉ト共ニ戸障子等ノ建具ト爲スコト頗ル多シ。

樅モ亦幹眞直ニシテ。長サ數丈ナルモノアリ。其葉ハ細ニ並ビテ。櫛ノ齒ニ似タリ。膚白クシテ質稍柔カナリ。多ク戸障子ノ框鴨居抔ニ用ヒ。又箱抔ヲ作ルニ用フ。

欅ハ幹大ナルモノ多シ。葉ハ櫻ニ似タレ𪜈。稍小ナリ。木理美ニシテ堅强ナリ。床板ニハ多ク之ヲ用フ。其木理ノ如輪ナルモノハ。最モ美ニシテ。家具ニ用ヒシモノ少ナカラス。

第十四課　三界の問答

昔プロシヤに賢明の君あり。其名をフレデリック大王といふ。嘗て國内を巡行して。或る小村に至る。村内に學校あり。大王之に臨み。生徒の業に就けるを見給ふ。業終りて後。大王親〳〵生徒に試問せり。時に傍に橙あり。乃ち

之を取りて生徒に示して。此は何界に屬するかと問ひ給へば。一人の少女。了は植物界に屬すと答ふ。大王又懷より金貨一枚を取り出して。此は何界に屬するかと問ひ給へば。少女は。礦物界に屬すと答ふ。是に於て大王は玉體を指して。余は何界に屬すると。問はれけるが。心の中には必ず動物界に屬すといはんと思ひ給へり。然るに。少女は以爲へらく。國王を指して。正しく動物界に屬すと申し奉らんもいと畏しと。暫く其辭を考へて躊躇せしかば。大王聲を和らげ。少女などて答へざる。答へ得ぬにやとのたまふ。少女は大王の顏の和げるを見て。大王は天界に屬し玉ふべしとゞ答へける。これを聞きて。大王は深く其言の至誠に出でたるを感じ。少女の頭を撫で。淚を浮べ給ひて。天は余に許すに天界に屬すべきを以てするかとのたまひしとゞ。

第十五課　仁德天皇

仁德天皇ト申シ、帝ハ。位ニ卽カセ給フノ後。攝

津ノ難波ニ都シテ。高津宮ニマシ〳〵。務メテ節儉ヲ行ヒ給ヘリ。四年ヲ經テ。アル日高殿ニ上リ。遠ク望ミ給フニ。村村ニ炊グ烟ノ揚ルコト甚ダ稀ナリケレバ。天皇ハ是比年五穀ミノラズシテ。百姓ノ困窮セル故ナラントテ。課役ヲ

除キ。窮乏ヲ賑ハシテ。百姓ノ苦ヲ救ヒ。宮垣破レ。屋簷崩ルレドモ。敢テ之ヲ修メ給ハズ。然ルニ其後風雨時ニ順ヒ。五穀善クミノリテ。豐年續キケレバ。百姓大ニ富メリ。三年ノ後。天皇又高殿ニ登リテ覽給フニ。今ハ炊グ烟ノ起ツコト盛リナリケレバ。大ニ悅ビテ。朕已ニ富メリトノタマフ。皇后怪シミテ。今宮室敗レ朽チテ。風雨ダモ禦ガズ。何ヲカ富メリト宣ハスルト問ヒ給フ。天皇ノタマハク。君ハ民ヲ以テ本トス。民ノ富ハ

卽チ朕ノ富ナリ。未ダ民富テ君貧シキモノハアラジ。今炊ク烟ノ盛リニ起ツハ。民ノ富メルナリ。民ノ富メルハ朕ガ富ナリト。此時諸國ヨリコモゴモ宮室ヲ修メンコトヲ請ヒシガ。天皇ハ未ダシトテ許シ給ハズ。後數年ニシテ。始メテ其請ヲ許シ給ヒシカバ。百姓恩ニ報イ奉ラントテ。壯者ハ老人ヲ扶ケ。婦人ハ幼者ヲ携ヘテツドヒ來リ。日夜勞作セシカバ。宮室日ナラズシテ成就セリ。天皇常ニ河流ノ溢レテ。居民ノ損害ヲ被ルヲ憂ヘ。命ジテ川ヲ浚ヒ堤ヲ築キテ。害ヲ防ガシメ給フコト多シ。其性寬仁ニシテ。節儉ヲ主トシ。租稅ヲ輕クシテ。人民ニ德惠ヲ布キ給ヒタレバ。風化大ニ行ハレ。天下ノ人聖帝ト稱シ奉リシトゾ。

第十六課　海綿

或る日。太郎海綿にて石盤を拭ひながら。父に問て曰はく。此石盤拭は。剪髮店にても見受たり。彼等は何に用ふるか。父の曰はく。海綿は輕く柔かにして。能く水を吸ひ。且つ彈力ありて。押しつぶ

すとも。直ちに舊の形に復へるものなり。故に髪を洗ひたる後。水を拭ひ取るに用ふるなり。太郎は之を聞き。海綿に水を吸はしめ。之を握りて其彈力を試み。又問て

曰はく。海綿は綿に似たる所あり。何れより産するものゾ。父の曰はく。海綿はもと海底に産する最下等動物の骨格なりと。太郎は甚だ不審に思ひ。是は植物に非ざるか。果して動物ならば。首足及び骨などあるべきに。全體疎にして唯穴あるのみと曰ふ。

父の曰はく。昔は之を動物とも植物とも定め難かりしが。近來は其動物に屬すべきものなること判然せり。今生活せる海綿を取り。精巧なる顯

微鏡にて窺ふときは。其内外に在る蛋白様のものは。皆海綿虫の群生するを視るべし。故にこの海綿一つの中に。幾千の小虫同居したるや計るべからず。因て其海綿を取り。細かに太郎に示して曰はく。此穴は水の出入せし所なり。此海綿は洗ひ淨めて晒したるものなれば。斯くの如く清けれども。海底にありて生活するものは甚だ美しからずと。

父又曰はく。我が煙草入の緒ドめに用ひたる珊瑚樹は。元來何と思へる。珊瑚樹と稱へ。木の枝の形をなして。植物の如くなれども。是も海底に産し。珊瑚虫とて微細なる動物の。集り棲みて造りし骨格なり。其色紅白の二種あり。此緒ドめは紅色のものにて。即ち其骨格を磨きて斯くの如く珠となしたるものなりといへば。太郎は始めて海綿の動物なることを知りとなり。

第十七課　貯畜

人ハ。常ニ貯畜ヲナシテ。不時ノ用ニ供セント心

掛クルコト肝要ナリ。身ニ貯畜ナキトキハ。時ニ臨デ不自由多キモノナリ。汝等金錢ヲ得タラン時ハ。徒ラニ費スコトナク。其内幾分ナリトモ積ミ置キテ。不時ノ用ニ供スベシ。少シヅヽノ金錢ヲ積ミ置クニハ。貯金預所ニ預クルヲ最モ宜シトス。貯金預所ニテハ。金錢ヲ預カル時。通帳ヲ渡シテ其高ヲ記シ置キ。一个月一圓ニ付四厘五毛ノ利子ヲ附ク。サレバ毎月十錢ヅヽヲ預ケテ。十年間續クトキハ。終ニ元利合シテ十五圓七十五錢トナル。拂込ミタル元金ハ。總計十二圓ナレドモ。其利積リテ斯クナルナリ。若シ此金ヲ自分ニ所持シテ。運用セザル時ハ。百年ヲ過グトモ利子ヲ産ムコトナシ。貯金預所ニ預クルトキハ。甚ダ安心ニシテ利子ヲ産ムノ益アリ。預所ノ利子ハ甚ダ僅ニ似タレドモ。絶エズ金錢ヲ預クルトキハ。積リ〳〵テ案外ノ高トナルモノナリ。諺ニ塵積リテ山ト成ルト云フハ。誠ニ道理ナリ。

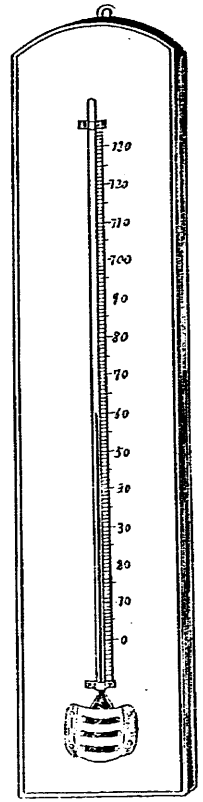
第十八課　會社

多くの人々組合ひて商業を營めば。一人より出す所の資本は僅にても。盛に商業を營み。多くの利益を得らるゝものなり。故に西洋の國々にては。昔より會社を立てゝ交易をなし。又は器械織物等を製造せり。我國にても。近來其益あるを知り。種々の會社を設立せり。商業を營む會社を。商會或は商社と云ひ。工業を營む會社を。製造會社又は製造所などと云ふ。銀行は商社の一つにして。株金を募りて營業の資本となし。又他人の金を預り。之を貸附けて。金錢の融通をつけ。或は爲替を組みて。金錢授受の煩勞を省き。或は紙幣を發して貿易の便を謀るもあり。又保險會社は。火災海上生命等の危險を保全する會社なり。此等の保險を依賴せんと欲する人は。其社と約束を結び。少額の金員を掛け置けば。會社は其人死亡し。或は火災に罹り。積荷を失へば。約束の金額を拂ひ渡すものなり。故に生命保險會社に入れば。身死すとも。遺族道路に飢うるの悲なく。火災保

險を依托すれバ。家燒失すとも。居處に迷ふの恐なく。海上の保險を依賴すれば。難船に遭ふとも積荷を失ふの患なし。此外鐵道會社郵船會社物産會社牧畜會社製紙會社等あり。商業を盛大にして物産を繁殖せしめんには。何れも欠くべからざるものなり。

第十九課　寒暖計

暑サ寒サノ度ヲ測ル器ヲ寒暖計ト云フ。寒暖計ハ。細キ玻璃管ノ球ニ水銀ヲ盛リ。度目ヲ盛リテ



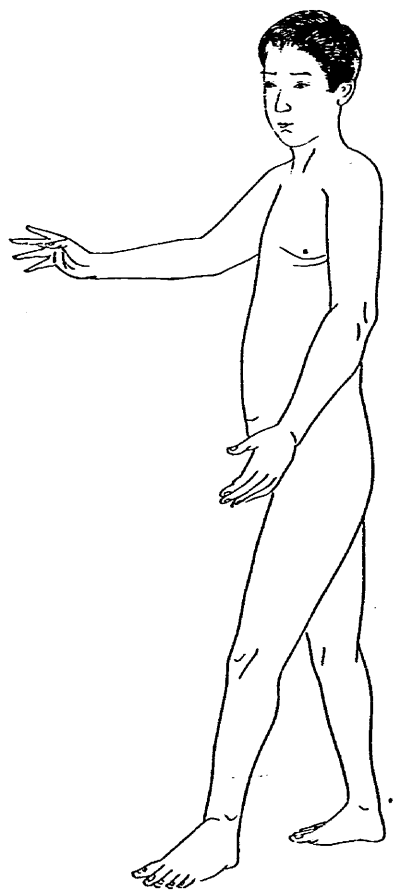
板ニ懸ケタルモノナリ。管中ノ水銀ハ。氣候暑ケレバ。膨脹シテ昇リ。氣候寒ケレバ。收縮シテ降ル。之ガ昇リ降リヲ見テ。暑サ寒サノ度ヲ知ルナリ。汝等試ニ指ヲ暫ク寒暖計ノ球ニ附ケヨ。必ズ管中ノ水銀ノ漸ク昇ルヲ見ン。是水銀ノ。指ノ熱ニ遇ヒテ膨脹シタルナリ。凡ソ

物ハ。熱ニ遇ヘバ膨脹シ。冷ユレバ收縮スルコト。此管中ノ水銀ヲ見テ知ルベシ。

寒暖計ニハ三種ノ別アレドモ。我國ニテ通常用フルモノハ。華氏ノ制ニシテ。茲ニ圖セルモノ卽チ是ナリ。此寒暖計ニテハ。水銀三十二度ニ降レバ。恰モ水凍リ。二百十二度ニ昇レバ。水沸騰シテ速ニ飛散ス。

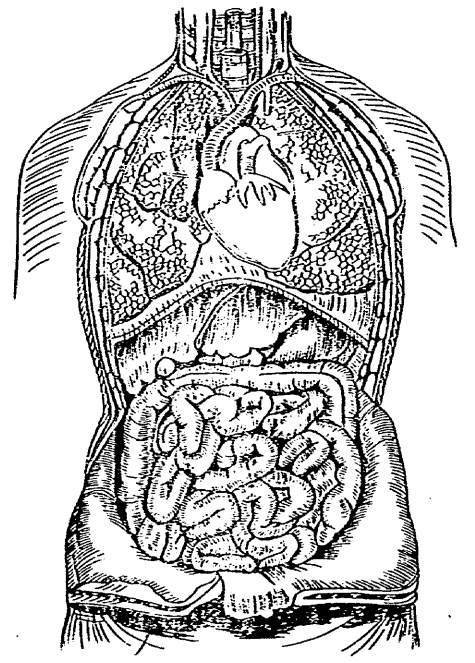
第二十課　人體

人の身體は。頭と胴と手足より成る。頭は大切な



る處なり。中に腦髓と名くるものありて。物事を知り。道理を辨へ。苦しみ樂しみ哀しみ等を感ず

るの用をなす。即ち精神の舍る所なり。胴は胸と腹との二部に分る。胸には心臓肺臓等の機關を藏む。之を圍む骨を肋骨と云ふ。心臓は血を出納する器械にして。其形蓮の蕾を倒にしたるが如し。左



の乳の下に手を當つれば。響の手に應ずるを覺ゆべし。是心臓の血を出納するに因て起る所の響にして。即ち脈の起る源なり。心臓より出づる血は。全身を循りて各處を養ひ。後又心臓へ歸る。皮膚の下に俗に青筋と云へるものは。筋には非ずして。心臓へ歸る血の流るゝ管なり。

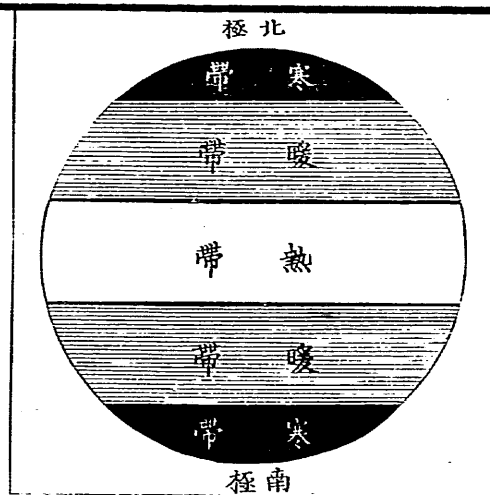
第二十一課　前課の續き

肺臓は空氣を呼吸する機關にして。胸の左右にあり。全身を循環して心臓に歸りたる血は。又出

で、此處に至り。再び鮮紅なる血となり。心臓に入りて。更に全身を循環す。腹には胃腸等あり。食物咽を下りて胃に至れば。胃液と云へる唾の如き水出でゝ。之に加はり。善く消化して。胃の下口より徐に小腸に下る。小腸よりは。膽液と云へる苦き汁と。膵液と云へる甘き汁とに加はり。食物全く消化して。乳汁の如く。粥の如きものとなり。細小なる管を傳はりて。遂に血中に交り。身體を養ふの用をなす。其養分とならざる滓渣は。大腸に至り。不潔の物となりて。終に體外に出づ。髪面耳目眉口舌唇齒咽喉手足肩指爪腰腕臂腿等は。汝等能く之を知るならん。前の圖に就きて其位置を語るべし。

第二十二課　世界

世界ノ形ハ。平カナル樣ニ見ユレドモ。其實ハ圓クシテ球ノ如シ。故ニ之ヲ地球ト云フ。地球ハ陸ト水トヨリ成リテ。其周リ凡ソ一萬百四十四里餘アリ。日々十里ヅヽ旅行スルトキハ。千日餘モ



經ザレバ。一周スルコト能ハズ。此クノ如ク廣大ナルガ故ニ。陸ノ上ニハ數多ノ國々アリテ。暑サ寒サ住民ノ性質ナドモ。一樣ナラズ。上ノ圖ニ寒帶ト記セル所ハ。寒サ最モ嚴シク。極ニ近キ所ハ。冰雪恒ニ消ユルコトナシ。此地ハ一年ノ中。唯夏冬ノ二季アルノミニシテ。夏時ハ長キ晝ニシテ。冬時ハ長キ夜ナリ。寒帶ノ人ハ。長ケ短ク。生質愚鈍ニシテ。常ニ毛皮ノ衣服ヲ着。土窟又ハ矮小ナル家ニ住メリ。其衣食トスルモノハ。羆馴鹿及ビ鯨海狗等ニシテ。植物ハ至テ少シ。

熱帶ト記セル所ハ。暑サ最モ甚シキ地ニテ。年中酷暑燔クガ如シ。其人物ハ。性質懶惰ニシテ生業ヲ勉メズ。多クハ裸體ニテ。茅屋ニ住ミ。天然ニ成熟スル果實ヲ食フ。此地方ニハ。獅子虎ノ如キ野

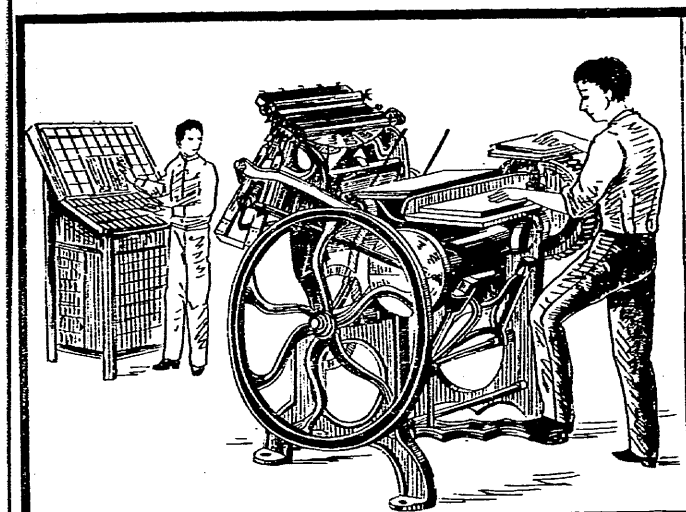
獸ノ猛キ者。蟒蛇ノ如キ爬虫ノ毒アル者。孔雀ノ如キ鳥類ノ美麗ナルモノヲ産シ。又椰子芭蕉ノ如キ植物繁生ス。

寒帯ト熱帯トノ間ニ。暖帯ト記セル地方アリ。此地方ハ。寒カラズ暑カラズ。其中ヲ得ル温和ノ地ニテ。一年ニ春夏秋冬ノ四季アリ。此地ノ人ハ身體健カニシテ。知識深ク。木造石造等ノ家屋ニ住ミ。絹布毛布等ノ衣服ヲ着ク。獸類ニハ。馬牛羊等ノ有用ナルモノ多ク。又善ク穀物果物ヲ産ス。我ガ日本國ハ。即チ暖帯ノ中ニアリ。

第二十三課　印刷

吾等ガ日日ニ讀ム新聞ハ。活版ニテ印刷シタルモノナリ。汝等ノ中ニハ。活版ニテ印刷スル所ヲ見タルモノアラン。活字ハ早ク外國ヨリ傳ハリタレドモ。廣ク世間ニ行ハレシハ。實ニ近年ノコトナリ。

活字ニ。木字鉛字銅字ナドアレドモ。盛ニ行ハルルハ鉛字ナリ。其法先ヅ長サ五分許ノ方柱ノ頭

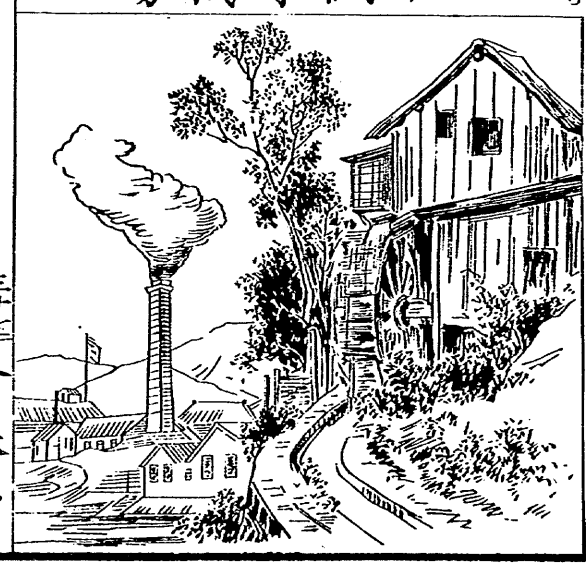


に。文字を刻みたるを。文言の如く列ね合せて。一面の版となし。次に之を器械に裝置し。版面に墨汁を塗り。白紙を其上に展べ。轉機を以て之を壓し。紙面に文字を印す。小き器械なれば。人力にて回轉すれども。大なる裝置のものは。蒸氣力にて回轉す。印刷既に終れば。版面を取り崩し。其活字は。更に他の書冊を印行するに用ふ。實に便利と謂ふべし。今汝等の持てる算術書は。活版にして。讀本は木版なり。木版は。板を削りて文字を刻み付けたるものなり。之を製するには。白紙に文字を書き。之を左向きに板面に貼り。小刀を以て。文字の跡を凸形に彫り殘したるものなり。今新聞の如きものを。斯く一々木に彫刻せんには。其手數の煩はしきこと何如

ずや若し然らんには。朝の事を夕べに報ずることなどは。とても望むべからざることなり。昔木版の業の開けざりし間は。いかなる書にても。皆一部づゝ筆にて寫したるものなりしが。木版出來てより。大に其便を得。世の人廣く書冊を讀むことを得たり。其後更に簡便なる活版器械の發明ありて。書冊新聞。多く世に出で。益々人の智識を開き。世の文明を進めたり。

第二十四課　工業

此ハ田舍ニシテ。工業ニ好キ地方ナリ。工業トハ。天然物ニ人工ヲ加ヘ。其形ヲ變ジテ。種々ノ物ニ製造スルコトナリ。故ニ工業ニハ。製紙製茶陶器製糸製鐵等種々アリ。此ニ蒸氣機關ヲ据ヱタル製糸場アリテ。烟筒ヨリ盛ニ



煙ヲ吹ケリ。又傍ニ水車場アリ。水車ハ。高キ處ヨリ河水ヲ引キ。車輪ニ注ギテ之ヲ廻ラシ。而シテ車軸ヨリ其力ヲ内部ノ器械ニ傳ヘ。之ヲ運轉シテ。布ヲ織リ。糸ヲ繰リ。穀物ヲ舂ク等ノ用ニ供ス。水ノ力ハ大ナルモノニシテ。其量多カラザルモ。能ク數多ノ器械ヲ動カスニ足ル。故ニ山間ニテハ。水車ヲ懸ケテ。水力ヲ用フルコト尤モ便ナリ。又水ヲ沸騰セシメテ蒸氣トスレバ。其力益強ク。動作甚ダ自在ナルモノナリ。蒸氣機關ハ。水ヲ大ナル鐵罐ニ入レ。烈火ヲ以テ沸騰セシメ、其蒸氣ノ膨脹カニテ。「ピストン」ト稱スル栓ヲ上下シ。其カヲ機關ニ傳ヘテ。種々ノ車ヲ運轉セシムルモノナリ。大ナル製造場ニテハ。蒸氣機關ヲ備ヘテ。之ヲ用ヒザル所ナシ。凡ソ工業ヲナスニハ。成丈人力ヲ省キ。價ヲ減ジテ。良キ品ヲ製スルコト肝要ナリ。

第二十五課　横濱港

此は横濱の港なり。灣内には數多の船舶碇泊セ

り。其中には。蒸氣船あり。帆前船あり。甲鐵艦あり。何れも皆大洋を渡航する船なり。今黒煙を揚げて將に出帆せんとする一艘の飛脚船あり。是は支那印度を經て。佛蘭西英吉利などの遠き國へ往來する船なり。是より

は毎日西に向ひ。四十日餘を經て。其國に達す。渺茫として果てもなき大洋に乘り出でたるときは。青空の外。目に觸るゝもの一つも無きこと。一月餘りも續くことあり。又洋中にて。圖らず暴風に遭ふことあり。此船中に乘込みたる人々は如何なる者ぞ。留學の爲めに行く人もあり。産物を齎して交易に行く人もあり。何れも航海の安穩ならんを望めるならん。

今又遥に彼方より入港する船あり。何れの國の

船なりと思へる。檣の上に日の丸の旗の翻るを見れば。我が帝國の船なること明かなり。是は吾等が待ち設けたる船にて。此度亞米利加より歸りしものならん。乘組の人々は。航海無難にて歸朝したれば。定めて喜ばしかるべし。此船には。彼の國の大學校にて卒業したる學士もあり。又有用なる機械を積み來りたる商人もありと聞く。斯くしげく萬國に渡海して。國々の有様を知り。種々の學問を磨き。益々交易を營むは。實に我が國をして。富强文明ならしむるの基なり。

第二十六課　神武天皇

我ガ天皇ノ祖先ヲ神武天皇ト稱シ奉ル。天皇ハ初メ日向ノ高千穗ノ宮ニマシマシヽガ。或ル時群臣ヲ集メテ宣ハク。我ガ天祖瓊瓊杵尊此國ニ降臨シタマヒシヨリ以來。已ニ多クノ年代ヲ歷タリ。然ルニ此西偏ニ都スルヲ以テ。遠方ノ民未ダ王澤ニ霑フコト能ハズ。村邑ノ長互ニ相凌ギテ治マラス。今聞ク所ニ據レバ。東方ニ美地アリ。

テ。山岳四方ヲ圍ミ。實ニ大業ヲ成スニ足レリト云フ。宜シク之ニ就テ都シ。以テ天下ヲ統一スベシト。

甲寅ノ年十月。天皇親ラ舟師ヲ帥ヰテ東征シ。筑紫ヨリ安藝ヲ經テ。行宮ヲ吉備ニ造リ。居マスコト三年。舟ヲ整ヘ糧ヲ備ヘ。遂ニ東ニ下リテ。浪速河内ヨリ路ヲ轉ジテ。紀伊大和ニ入リ。國中ノ賊ヲ誅シ。六年ニシテ悉ク中州ヲ平ゲ。辛酉ノ年一月。大和ノ國橿原ノ宮ニ於テ位ニ即カセ給ヒヌ。

故ニ此年ヲ以テ我國ノ紀元トス。今明治二十年ヲ距ルコト實ニ二千五百四十七年ナリ。神武天皇ヨリ。今上天皇ニ至ルマデ。御代ノ數百二十二世ヲ重ネ。皇統連綿トシテ絶エズ。世界廣シト雖モ。未ダ此クノ如キ皇統一系ノ國ヲ見ズ。固ヨリ列聖德澤ノ深キニヨルト雖モ。亦國民君上ヲ敬戴スルノ美風ヲ見ルニ足ル。

小學簡易科讀本卷六終

K1208-67-2

明治二十年九月廿六日版權免許
仝　廿一年一月　出版

原價金八錢

著者　静岡縣士族　中根淑
北豊嶋郡金杉村百八十五番地

同　千葉縣平民　内田嘉一
本郷區駒込西片町十番地

出版人　東京府士族　原亮三郎
日本橋區本町三丁目十七番地

大賣捌　大阪北久宝寺町四丁目　金港堂原亮三郎支店

賣捌　岐阜仙臺　金港堂支店
各府縣下代理大賣捌所